

2021年12月19日（日）「マリアの賛歌」

ルカ 1:46-55

46 そこで、マリアは言った。「私の魂は主を崇め、47 私の霊は救い主である神を喜びたえます。48 この卑しい仕え女に、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、私を幸いな者と言うでしょう。49 力ある方が、私に大いなることをしてくださったからです。その御名は聖であり、50 その慈しみは代々限りなく、主を畏れる者に及びます。51 主は御腕をもって力を振るい、思い上がる者を追い散らし、52 権力ある者をその座から引き降ろし、低い者を高く上げ、53 飢えた人を良い物で満たし、富める者を何も持たせずに追い払い、54 慈しみを忘れず、その僕イスラエルを助けてくださいました。55 私たちの先祖に語られたとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。

クリスマスおめでとうございます。2021年も残すところわずかとなりましたが、一年の締めくくりに主イエスのご降誕をお祝いできることを心から感謝しております。長らく会堂に来て礼拝を守ることができていない方もいらっしゃると思いますが、オンラインを通してこの喜びをお伝えすることができればと願っています。

さて、昨年から取り組み始めたことですが、クリスマス礼拝ではクリスマスキャロルの解説と歌を通して、少し違った角度から御言葉を味わうようにしております。有名な讃美歌の歌詞を味わい、そこで歌われている事柄の背景にある聖書箇所を探ってまいります。今日は讃美歌95番「わが心は」の解説となりますが、この歌詞の基になっているのはルカ1:46-55に描かれている「マリアの賛歌」です。

場面としては、少女マリアに天使ガブリエルが現れ、間もなく救い主をお腹に宿すことになるとの告知を受けて後、その報告のため親戚であるエリサベツの許へ行った。すると、先にバプテスマのヨハネを身ごもっていたエリサベツは、胎児が喜び踊るのを感じ、二人共に聖霊に満たされて賛美をしたという場面です。実際の聖書箇所には照らしながら歌詞を見てまいりましょう。

讃美歌 95 番

1.

わが心は 天つ神を 尊み
わが魂 救い主を
讃めまつりて 喜ぶ

私の魂は主を崇め、私の霊は救い主である
神を喜びたたえます。(1:46-47)

受胎告知のストーリーは美しいですが、告知を受けたマリアの境遇は、実は生半可なものではありませんでした。既にヨセフと婚約関係にあった彼女が、夫婦が結ばれる前に誰の子かも分からぬ赤ちゃんを身ごもったとあらば、倫理性の高いユダヤ人の社会では処刑されるほどの危険が伴っていました。しかし、彼女は救い主をその身に宿した喜びのあまり、そのような恐れに支配されることは微塵もありませんでした。エリサベツに会いに行ったのは、彼女にも起きているという神の御業を見るためでした。エリサベツは高齢にして子を宿していた。その子もまた、特別な神からの賜物として、救い主の道備えをする人物になると預言されていたのです。この二人の貧しい女性たちの周辺でとてつもない神の御業が起き始めている。彼女たちこそが救済史を担う。そのことを認識し合い、共に神を誉め讃えたのです。

2.

数に足らぬ はしためをも 見捨てず
よるずよ
 萬世まで 幸いつつ
 恵み給う 嬉しさ

この卑しい仕え女に、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、私を幸いな者と言うでしょう。(1:48)

ここでマリアは、取るに足らない自分が「救い主の母」として選ばれた喜びを語っています。「救い主の母」という言い方は少々誤解を与える可能性があるかもしれません。マリアを「聖母」として崇めてしまう危険性があるからです。しかし、彼女がこの救いの出来事において担った役割の大きさは、強調してもしすぎることはないでしょう。彼女は終生、人々から誤解の眼差しを受けて生きたのかもしれませんが、彼女の身に起きた「超自然的な懐妊」を理解できない人々は、マリアの胎に宿っている子について、様々憶測をめぐらし、陰で悪い噂話が流れていたかもしれないのです。マリアはこの永続的な苦しみと共に生きなくてはなりませんでしたが、それはキリストの苦しみ的一端を担うことでもありました。しかし、この箇所を読む限りにおいて、彼女の中ではこれを「苦しみ」とは思っていないようなのです。ただただ、取るに足らない自分を選んでくださった神の恵み、自分の人生に起きた幸いを歌っています。

3.

御名は清く 大御業は 畏し
 代々に絶えぬ 御慈しみ
 仰ぐ者ぞ 受くべき

力ある方が、私に大いなることをしてくださったからです。その御名は聖であり、その慈しみは代々限りなく、主を畏れる者に及びます。(1:49-50)

ここでは、ひたすら神の御名が崇められています。「御名」は、神の聖い性質そのものを表す。神の名である「ヤハウエ」とは、共におられるということ。マリアと永遠に共にいてくださる方であるという信仰告白が含まれています。「大御業」(大いなること)とは、マリアに及んだ受胎だけを指すのではなく、これから全世界に及んでいこうとしている救いの御業の全体が暗示されているでしょう。マリア自身にも十分には理解できないほど大きなことがこれから起きてくる。「代々に絶えぬ御慈しみ」(その慈しみは代々限りなく)とは、信じる者を神が「我が子」として受け入れ、愛し、守ってくださることです。

4.

低き者を 高め給う 御恵み
奢る者を 取りひしぎて
散らし給う 御力

主は御腕をもって力を振るい、思い上がる者を追い散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を何も持たせず
に追い払い (1:51-53)

マリアは若干 10 代前半の少女ではありましたが、この世を司る権力者の圧力を知っていました。いつ如何なる時代にも、金の力によって世界は動かされています。現在も、国家が頭を下げるほどのマンモス企業が世界には存在します。見えない権力によって首根っこを掴まれたような世界に生きる一般庶民の弱さ、無力さ。マリアもその一人であることを自覚していました。しかし、彼女は同時に知っていました。それでも世の権力者は人間に過ぎないことを。人の魂を支配することのできない有限なる人間を恐れてはならないと。彼女は、世界の究極的な支配者は神であることを知っていたのです。今は悪が栄えていようとも、神はやがてすべてを正し、再創造の御業を成し遂げてくださると信じていました。

5.

アブラハムの 裔を永遠に 顧み
イスラエルを 忘れませで
救い給う 尊さ

慈しみを忘れず、その僕イスラエルを助けてくださいました。私たちの先祖に語られたとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。(1:54-55)

ここでマリアは、イスラエル民族の父祖アブラハムに与えられた神からの約束を思い起こしています。「地上のすべての国民はあなたの子孫によって祝福を受けるようになる。あなたが私の声に聞き従ったからである」（創世 22:18）。ここでは、アブラハムの子孫だけが祝福を受けるとは言われていません。アブラハムの子孫を通して全世界の民が祝福を受けると約束されているのです。「アブラハムの裔」とは、アブラハムが信じた神を心に受け入れるすべての人を意味し、やがて異邦人も主の御前に招かれていくことが暗示されています。ここでマリアがどういう意味で「イスラエル」と言っているかは定かではありません。彼女の中では「イスラエル民族」という意味に留まっていたかもしれない。しかし、彼女は知らずして「霊的イスラエル」について語っており、主イエスを信じるすべての人が自由に神の許へ行くことができる福音を提示しているのです。神はアブラハム契約を永遠にお忘れになることなく、その契約にあずかる全世界の民を同様に祝福し、ご自身の子としてくださると。

讃美歌 95 番では、このように「マリアの賛歌」の全体が凝縮されています。貧しい一人の女性が神によって選ばれ、壮大な救いのご計画の一ページを担うことになりました。彼女の口をついてほとぼしり出た賛美は、私たち自身の賛美ともなります。救いが世に来了。誰の救いか。イスラエルだけのものではありません。全世界を覆う神の恵みが到来したのです。私たちも、イエス・キリストによって、神の子とせられ、祝福を受け、永遠に神の子としていただくことができるのです。

【祈り】

救い主イエス・キリストの父なる神様。信仰の父アブラハムに与えられた救いの約束は、名もなき少女マリアを母として生まれたた主イエスによってもたらされました。人知れず、ひっそりと家畜小屋でお生まれになった幼子が、多くの人にいのちを与える存在であられたのです。私たちもこの方によって、罪の赦しと永遠のいのちが与えられました。そして、神の子としての特権にことごとくあずかる幸いを得ています。この喜びを讃え歌うクリスマスを今年も存分に味わいたいと思います。御使いの賛美と共に、私たちも心から歌います。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
名もなき少女マリアを選び、救い主の母として召し出し給うた、父なる神の愛、
アブラハムの裔として生まれ、その約束をことごとく成し遂げ、多くの人のいのちの礎
となり給うた、主イエス・キリストの恵み、
闇世を打ち破る希望の光を、その心に受け入れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。